

論文

——シンポジウム「芸術のための芸術/世界のための芸術——開かれた唯美主義の形態」

美の追求と知の探求——ヴィクトリアン・ソロモンに なりたかったD・G・ロセッティ

加藤 千晶

I 序——美への信仰

ダンテ・ゲイブリエル・ロセッティが没した翌年の1883年、ロンドンで彼の作品を集めた大規模な展覧会が2回、ロイヤル・アカデミー・オブ・アーツ(王立美術院)とバーリントン・ファイン・アーツ・クラブで開かれた。153点ものロセッティの絵画を展示した後者の展覧会についての「ロセッティと美の宗教」と題した批評の中で、F・W・H・マイヤーズ(Frederic William Henry Myers, 1843-1901)¹は、「『唯美主義運動』は当世のたんなる流行ではない」と述べ、「この運動の指導者たちが及ぼす影響力を凌ぐような力をもつ科学者はほとんどいないし、神学者にいたっては尚更である」と主張した(214-15)。おそらく前年に出版されたウォルター・ハミルトン(Walter Hamilton, 1844-99)の『英国の唯美主義運動』(1882)を意識しつつ、またハミルトンと同様に亡き画家詩人への追悼の念をあらわしつつ、マイヤーズは、ハミルトンが提示したような、ロセッティやラファエル前派を中心として華やかに一世を風靡した運動という「唯美主義」観にささやかに異を唱え、²唯美主義、そしてロセッティの芸術は、科学や宗教に取って代わるような、真理を啓示し、神秘を探索する役割を担いようことを主張したのである。

マイヤーズは、《プロセルピナ》や《パンドラ》といった神秘的な女性を描いたロセッティの作品を「新しい宗教の神聖なる像」と呼び、ロセッティが女性の姿や自然の風物を通して「触知できない美、底知れぬ空間、測り知れないこの世ならぬ日の日没と復活について語」っていると賛美し、「新奇なシンボリズム」に満ちた彼の芸術の中では、美と宗教が融合している

と述べた(219)。³ 科学の進歩と信仰のゆらぎが多く、知性を混迷に陥れていた時代に、美にその等価物を見いだそうとしたマイヤーズの論は、幾分美文調に過ぎるとはいえ、自らの信条について多くを語らなかつたロセッティの同時代の思潮への反応について示唆を与えている。本論では、宗教的懐疑を背景としたロセッティの感性の時代精神への反応を、主に彼の詩作品から、彼が愛読したという旧約聖書の「コヘレトの言葉」を参照しつつ考察し、不可知論的な立場に留まりつつも、存在の意味や真理を希求し続けた詩人の、芸術における闘いの過程を明らかにしたい。

ラファエル前派同盟結成当時(1848年)の頃、ロセッティは自ら“Art-Catholic”と名付けた一群の詩を作り、その中のひとつ“Ave”という詩は、三位一体や聖餐式を強調するなど、カトリックの信仰を仄めかす要素がある。しかし、弟のウィリアム・マイケル・ロセッティ(William Michael Rossetti, 1829-1919)によると、この詩にローマ・カトリックへの強い信仰を読み取るのは誤りで、兄はイングランド教会の教育を受けたが、この詩を書いた頃には信仰は薄くなっており、彼の芸術は「必ずしも教義においてではなく、心情において」「中世的で反近代的な」カトリックだったのだという(D. G. Rossetti, *Works* 661)。

初期ラファエル前派の美術とイングランド教会高教会派との関連性は、ラファエル前派同盟のメンバー自身によって否定されているが、ロセッティはじめ彼らの作品が1830年代から40年代にかけて高まりをみせたオックスフォード運動の影響を強く受けているということは、アラスティア・グリーヴが指摘している。例えば、絵画《処女マリアの少女時代》(*The Girlhood of Mary Virgin*)【図1】では、床に積み重ねられた本の背表紙に、カトリックの教理で重視される七つの徳(正義、勇気、節制、賢明、希望、信仰、愛——この絵では「正義」は省かれている)が書き込まれていて、この絵と同じ主題の詩「マリアの少女時代」(“Mary’s Girlhood”)においても、同様の内容が詠われているが、初期のロセッティのこのような特徴は、オックスフォード運動の唱道者の一人ジョン・キーブル(John Keble, 1792-1866)



図1 *The Girlhood of Mary Virgin*, 1848-49. D. G. Rossetti. Oil paint on canvas. 832 x 654 mm. Presented by Lady Jekyll 1937. Tate, London. Photo:Tate

の詩集『キリスト教暦年』(*The Christian Year*, 1841年)の影響があるという(Grieve 294)。イングランド教会の中のカトリック性の復活を試みたオックスフォード運動は、初期のロセッティの芸術において、信仰上の目的というよりは、むしろ美を構成する要素として、取り入れられていた。

さらに、ロセッティは、自作の詩集に先駆けてダンテの『新生』(*Vita Nuova*)の翻訳を1861年に出版しているが、この翻訳において、彼は中世キリスト教の救済のレトリックや恋愛詩の伝統を意図的にデフォルメして19世紀的な美女の図像を作り、宗教の審美化・平面化を試みている。⁴ ロセッティは、絵画・詩の両面において、既成の宗教の形式を自らの芸術に取り込んで審美化したが、このようなロセッティや周辺の芸術家たちの傾向を、唯美主義の代表的な批評家ウォルター・ペイターがやや過激な論調で言い表している。彼は1866年に最初に出版した匿名の批評の中で、「宗

教の性質には、宗教的な意味とはまったく異なる芸術的価値をおびるような側面が幾つかある」と述べた。1889年に実名で発表された際には、このくんだりを含む挑発的な箇所は削除されており、当初の匿名の批評には、1864年に教皇ピウス9世が発表した『誤謬表』への反発が露わになっている。⁵

カトリックに対する立ち位置は様々であるとはいえ、引用の一節は、当時の唯美主義者たちの芸術観・宗教観を鋭く映し出しているといえよう。

II ロセッティの宗教観—生い立ちから

ここで、ロセッティの宗教観を、彼の生い立ちからふりかえてみよう。イギリスに亡命したイタリア人の父と、イタリア人とイギリス人の混血の母をもつロセッティの家庭は、カトリックとプロテスタントの混合だった。母 (Frances Mary Lavinia, 旧姓 Polidori, 1800-86)、⁶ 姉 (Maria Francesca Rossetti, 1827-76)、妹 (Christina Georgina Rossetti, 1830-94) は敬虔なイングランド教会高教会派の信者で、姉は修道女になっている。イタリア愛国詩人である父のガブリエーレ・ロセッティ (Gabriele Rossetti, 1783-1854) は、名目上はカトリックだったが、反教皇の思想を主張する著作を著した。兄弟二人はイングランド教会で洗礼を受けたが、やがて教会から足が遠のいてしまう。⁷

W・M・ロセッティの回想によると、ロセッティ家の子供たちは、母親に連れられて教会に行き、聖書や祈り、教義問答などを学んだが、父はそれについて干渉しなかったことが記されている (W. M. Rossetti, *Some Reminiscences* 121)。14歳の頃 (1843年頃) に信仰を失ったと告白する W・M・ロセッティは、晩年、自身の十代の頃を振り返り、当時は「不可知論者“agnostic”」という用語はなかったが、その言葉が1860年代に考案されたあと、自分の精神的な立場を最も明確に言い表す用語だと思ったと語っている (*Some Reminiscences* 122)。兄のロセッティは自らが“agnostic”だと表明してはいないが、友人のウィリアム・ベル・スコット (William Bell Scott, 1811-90) が彼のことを“extreme agnosticism”と評したためか (D. G. Rossetti, *Correspondence* 5:401)、その後批評家達に“agnostic”と見なされる傾向にある。⁸

また、1860年代にはハーバート・スペンサー (Herbert Spencer, 1820-

1903)が『第一原理』(1862)を著し、「不可知なもの」(“The Unknowable”)という章で「あらゆる現象の背後に存在する実在は知り得ないものであり、絶えずそうであるに違いない」と述べているが、この表現はロセッティの詩の言語と強く響きあっている。1830年代から1850年代にかけて、チャールズ・ライエル(Charles Lyell, 1797-1875、『地質学原理』(1830-33))、ロバート・チェンバーズ(Robert Chambers, 1802-71、『創造の自然史の痕跡』(1844))、チャールズ・ダーウィン(Charles Darwin, 1809-82、『種の起源』(1859))らの地質学、生物学上の探索が、聖書の記述や道徳の絶対的な規範を揺るがしていた時代に、ロセッティ兄弟は、新旧の宗教が混在する家庭で、幼少期から多感な青年期を送った。イギリスの唯美主義運動の重要な役割を担うラファエル前派の中心メンバーであった彼らもまた、時代精神の波を敏感に感じ、宗教的に揺らぎながら芸術活動をしていたことは想像に難くない。

ロセッティの宗教的態度について、弟W・M・ロセッティの記録を辿ると、「兄は自分より少し早く信仰を捨てて異端者となった」が、「自分ほど信仰からはっきりと離れていたわけではなかった」(*Some Reminiscences* 129)という。そして「明らかに懐疑的」で「定式化された教理は無視」したが、「超自然的なものに惹かれる傾向は生来あった」(*Family Letters* 1: 380)。心霊主義に惹かれ、不滅性を確信していたが、「死後すぐに訪れる至福や撤回不能の断罪は信じず」、浄化と贖いの期間があるローマ・カトリックの煉獄のようなものを信じていた(*Family Letters* 1:381)。また、彼の書簡には、1850年代初めから心霊術の催しに出席していた記録があり、異端の神秘や死後の生命への強い関心が青年期からあったことがわかるが、一方聖書は愛読しており、「キリストという人物には敬意を持つ」(*Family Letters* 1: 380)など、W・M・ロセッティが証言するように、弟ほど確信した「異端者」ではなかったようである。

III ロセッティ自身の主張—詩の書き換えをめぐる

ロセッティ自身は自分の宗教的立場について雄弁に語っていないが、数少ない発言のひとつが、労働者大学(Working Men's College)で教鞭を取っていたときの教え子のジェイムズ・スメサム(James Smetham)に宛てた

1865年12月10日の手紙の中にみられる。ロセッティは、自分には特定の宗教への信仰がないことを述べたあとで、不信仰は「信じるという生来の衝動の欠如から起こるのではなく、また自分だけが完全な意味において信仰と呼ぶべきもの(“what I should alone call belief in a full sense”)を自分が持てるのかどうかを熟慮しないために起こるものでもない」と自分の立場を弁護している。つまり、彼は既成の宗教に対する信仰心と、自分なりの信仰を区別して考えていて、後者の「信仰」を持てる可能性を仄めかしていたことがわかる(*Correspondence* 3:357)。

もうひとつの重要な発言は、「雲の境界」(“The Cloud Confines”)という『フォートナイトリー・リビュー』誌に1872年に掲載された詩に関する説明の中にみられる。⁹ 自然界・人間界の知り得ない神秘に対する憧憬を詠ったこの詩は、「典型的なヴィクトリア朝時代の反応」と解釈される(Howard 120)が、この詩の結末部分の書き換えについて、弟や友人に手紙で相談するなかで、ロセッティは信仰について謎めいた発言をしている。ここで追記すべきこととして、『フォートナイトリー・リビュー』誌には、ロセッティのソネット集「生の家」(“The House of Life”)のうちの16篇が、詩集刊行に先立って1869年に掲載されているが、この年の同誌の目次には、ハクスリー(T. H. Huxley, 1825-95)、ミル(John Stuart Mill, 1806-73)、ティンダル(John Tyndall, 1820-93)など時代の先端の思想家・科学者たちと、D・G・ロセッティ、モリス、スウィンバーンらの名前が共に並び、科学者と文学者たちが、新しい知識と文化を共有していたであろうことがわかる。また当時の編集長ジョン・モーリー(John Morley, 1838-1923)は、ロセッティと親交があったことが書簡からわかるのだが、モーリーは、ハクスリーとともに、“agnostic”という語が最初に使われたとされるMetaphysical Societyのメンバーでもあった(Lightman 11)。

1連が12行の、5連からなる詩の内容を辿ってみると、1連では、神秘を明かすことのない自然を前にした人間の孤独な姿が描写され、7、8行目で“unknown”という言葉が二度繰り返されたあと、最後の4行で、「それでも我々は進みながらこう言うのだ／『知るべきことは何であれ／我々はいずれ知るだろう／などと思うのは、時に、奇妙なことだ』(Still we say as we go, - / “Strange to think by the way, / Whatever there is to know, /

That shall we know one day.”)と、科学の進歩による知識の発展を皮肉るかのような詩行が続き、この4行は、この詩の5連すべての末尾にリフレインとして繰り返される。2連では過ぎ去った過去を記録する言葉(「名前」[2行目]、「物語」[3行目])の空しさを歌い、3連では、擬人化された「時」に呼びかけて、太古よりの人類の憎しみ・争いの徒労を嘆き、4連では、愛が死に征服される不条理を語り、最終連で、自然界は沈黙して真理を語らず、過去は忘れられ、現在は不確かで、未来は「封印された苗床」として未知であり、これら時間の狭間にいる我々は何物なのか、という問いに対しては、同じ不可知論的なリフレインを繰り返して詩を締めくくっている。

The sky leans dumb on the sea,
 Aweary with all its wings;
 And oh! the song the sea sings
 Is dark everlastingly.
 Our past is clean forgot,
 Our present is and is not,
 Our future's a sealed seedplot,
 And what betwixt them are we?—
We who say as we go,—
“Strange to think by the way,
Whatever there is to know,
That shall we know one day.” (ll.49-60)

この最終連の最後の5行について、ロセッティは当初別の案を二つ用意していた。ひとつは、1871年8月11日にW・B・スコットに宛てた書簡に、もうひとつは同年の9月2日と10日にスコット宛、9月2日に友人のヘイク医師(Thomas Gordon Hake)宛、9月10日にW・M・ロセッティ宛に出された書簡に記したものである。¹⁰

And what betwixt them are we?
Atoms that nought can sever
From one world-circling will,—

To throb at its heart for ever

Yet never to know it still. (8月11日 スコット宛、*Correspondence* 5:107)

And what must our birthright be?

Oh never from thee to sever,

Thou Will that shalt be and art--

To throb at thy heart for ever

Yet never to know thy heart.

(9月10日 W. M. ロセッティ宛、*Correspondence* 5:144)

8月11日の手紙のバージョンでは、「我々は何物か」という問いに対し「世界をくるくると旋回させている一つの意志」(いわば神のような存在)から「何者も引き離すことができない粒子」であると述べ、9月10日のバージョンでは、大文字の“Will”に対して“thou”“thee”と呼びかけ、現在も未来も存在するこの“Will”から、引き離されたくない、そしてその心を知ることではできなくても、その心のうちに自分も鼓動していきたい、という願望を詠っている。上記の最初の案に関して、ロセッティは、W・B・スコットに次のように解説している。

“I cannot suppose that any particle of life is *extinguished*, though its permanent individuality may be more than questionable. Absorption is not annihilation; & it is even a real & retributive future for the special atom of life to be re-embodied (if so it were) in a world which its own former ideality had helped to fashion for pain or pleasure.” (10 September 1871, *Correspondence* 5 : 141. イタリックは原文のまま)

「生命の粒子が消滅するとは思えない」、「吸収されることは、消滅することではない」、また、「生命の特別な粒子が、かつては観念の姿となって形成する役目を果たしていた世界で、新たな形を得るということは・・・正真の、報われる未来ですらある」という考えの吐露は、かつてジェイムズ・スメサムに語った「自分だけが信仰と呼ぶべきもの」の説明とも考え

られ、個体の生命を超えて大きな存在に自らを委ねたいという詩人の願いが現れていると思える。¹¹ところが最終的には、弟への手紙(同年9月10日)で、自分は人格神(“a personal Deity”)を意図したのではないと語り、不可知論的なりフレインを繰り返すことを最終案としている(*Correspondence* 5: 144)。

IV 旧約聖書「コヘレトの言葉(伝道の書)」の影響

ところで、1911年版のロセッティの作品集の序文で、W・M・ロセッティが、兄の詩的才能の育成に影響を与えた書物として挙げているなかに、旧約聖書の「コヘレトの言葉」(“Ecclesiastes”)がある。この書物の著者は自らを「コヘレト」と称し、この語が「招集する」という動詞に由来することから、公的な集会(ギリシア語の「エクレーシア」)で語る「説教者」と解釈され、この書は伝統的にイスラエルの賢王ソロモンに帰されてきた。現世の空虚さや不条理など、聖書の中でも異質な要素を含む「コヘレトの言葉」をロセッティは愛読し、臨終の日にも、弟が読んできかせようと提案したことが(却下されたが)伝記に記されている(Doughty 666)。

「コヘレトの言葉」とロセッティの詩に共通にみられる特徴としては、現世の空虚・不条理、人間の無力さ、快樂の探求、知恵・言葉への欲求と懐疑、過去・現在・未来の融合があげられる。“Vanity of vanities”という言葉に始まり、すべてが空しい、と“vanity”を5回繰り返す第一声のあと(1:2)、コヘレトは「すでにあったことはこれからもあり／すでに行われたことはこれからも行われる(“The thing that hath been, it is that which shall be: / and that which is done is that which shall be done.”)」(1:9)と、過去と未来が同じ性質を帯びることを指摘し、多くの知恵と知識を得たけれども、知識が増えれば悲しみが増すことを嘆き(1:16-18)、「今あることはすでにあった、これから起こることもすでにあった(“That which hath been is now: and that which is to be hath already been;”)」(3:15)と現在・過去・未来の同時性を語る。さらに、「言葉を控えよ」(5:1)と、多弁をいましめ、「知恵ある者になろう」としても「遠く及ば」ず、「存在するものは遠く／深く、さらに深い。誰がそれを見いだせるのか」(I said, ‘I will be wise’, but it was far from me. That which is far off, and exceeding deep, who can find it

out?”) (7:23-24) と不可知論的な嘆きを吐露している。そしてやがて行く「陰府(よみ)には／業も道理も知識も知恵もない」のだから (9:10) 楽しく飲み食いして、現世でできることに力を尽くすよう諭している。

V ロセッティのソネット「生の家」(“The House of Life”)—未来へ開かれる可能性

次に、ロセッティのソネット集より、「コヘレトの言葉」と通じる要素—一人知を超える領域・認識への(空しい)希望、現世の彼方と接する境界、時間／無時間(永遠)の対比や融合、言葉への不信／信頼など—が含まれる詩を具体的に検討する。

まず初めに、ソネット第101番「ただひとつの希望」(“The One Hope”)は、空しい欲望と空しい後悔が、共に手を取って死へと向かい、すべてが空しくなる、と「コヘレトの言葉」の響きを強く想起させる詩行で始まる。

SONNET CI THE ONE HOPE (1870)

When vain desire at last and vain regret

Go hand in hand to death, and all is vain,

What shall assuage the unforgotten pain

And teach the unforgetful to forget?

Shall Peace be still a sunk stream long unmet,—

Or may the soul at once in a green plain

Stoop through the spray of some sweet life-fountain

And cull the dew-drenched flowering amulet?

Ah! when the wan soul in that golden air

Between the scripted petals softly blown

Peers breathless for the gift of grace unknown,—

Ah! let none other alien spell so'er

But only the one Hope's one name be there,—

Not less nor more, but even that word alone.

忘れられない痛みに苦しんでいる詩人は、自らの人生の過去に捕らわれ

ている。W・M・ロセッティの注釈によると、詩人は、「消滅“annihilation”」ではなく「魂の最後の平安」を求めているが、その平安を得られることは、当然望めそうにないかもしれないと5行目までの詩行で語られる (*Designer and Writer* 261)。しかし6行目から別の新しいヴィジョンが現れ、詩人は自らの魂が、生命のしぶきを浴びて再生し、「緑の原」で「露に濡れた花咲く護符を摘む」様子を想像する。魂は、光り輝く大気の中で、ギリシャ神話でヒアシンスの名が刻まれた花卉のように、希望の言葉が刻まれた花びらの間を覗き込み、その間から「知られざる恩寵の賜物」(“the gift of grace unknown”)を垣間見ることが希望する。ソネット集の最後に配置されたこの詩では、空しい欲望は、不可知の恩寵を授かるかもしれないという強い希望、そして希望を与える「名前」、「言葉」に対する信頼(懷疑ではなく)で締めくくられる。

次に、第97番「重ね書き」(“A Superscription”)では、擬人化された時間が、時間の様々な局面をあらゆる複数の名前を持って詩人の前に現れる。

SONNET XCVII A SUPERSCRPTION (1868)

Look in my face; my name is Might-have-been;

I am also called No-more, Too-late, Farewell;

Unto thine ear I hold the dead-sea shell

Cast up thy Life's foam-fretted feet between;

Unto thine eyes the glass where that is seen

Which had Life's form and Love's, but by my spell

Is now a shaken shadow intolerable,

Of ultimate things unuttered the frail screen.

(お前の目には鏡を掲げる。そこに映るはかつて

〈生〉と〈愛〉の形^{なり}をしていたが、わが魔法によって

今は見るに耐えぬ揺れる影となったもの。

語られぬ究極の物事を遮るかよわい衝立。5-8行、松村訳)

Mark me, how still I am! But should there dart

One moment through thy soul the soft surprise

Of that winged Peace which lulls the breath of sighs,–
 Then shalt thou see me smile, and turn apart
 Thy visage to mine ambush at thy heart
 Sleepless with cold commemorative eyes.

“Might-have-been”（〈なり得たかも知れない〉）は、仮定の過去で、“No-more”（〈もはやない〉）、“Too-late”（〈遅すぎた〉）、“Farewell”（〈さらば〉）は、過去の結果の現在あるいは未来の姿である。ここには、先に紹介した「コヘレトの言葉」の引用の様々な時間の同時性の響きが明らかに読み取れる。擬人化された時間は、死の海の浜辺に立つ詩人の耳に、とむらいの歌が聞こえる貝殻を当て、目には鏡を掲げるが、そこに映るのは、〈生〉と〈愛〉の変わり果てた姿で、この「かよわい衝立」（“frail screen”）は、その背後にある「語られぬ究極の物事」（“ultimate things unuttered”）の神秘を垣間見せることもない。“ultimate things unuttered”は、先に引用した「ただひとつの希望」の中の“the gift of grace unknown”のネガティブな相対物といえる。セステットの初めで、じっとしているように見える時間は、しかし、詩人の魂に平和が訪れるのならば、たちまち、詩人の心で、眠らずに見張りをしている“ambush”（伏兵）の存在に目を向けさせる。幾重にも襞のように分かれた、重層的な時間の分身に心の中で見張られている詩人は、記憶から解放されず、様々な時間の同時性ゆえに苦しんでいる。

第34番の「暗い鏡」（“The Dark Glass”）の前半、オクテットで、愛する女性の姿を通して神秘を探ろうとする詩人は、「誕生と死」という現世の時間の境界を超えて、その外の知覚できない領域に思いを馳せ、聴覚や視覚が役に立たないと知りつつも、自らの感覚で、「永遠なる時の…究極の前哨地」に到達しようとする。

SONNET XXXIV THE DARK GLASS (1871)

Not I myself know all my love for thee:
 How should I reach so far, who cannot weigh
 To-morrow's dower by gage of yesterday?
 Shall birth and death, and all dark names that be

As doors and windows bared to some loud sea,
Lash deaf mine ears and blind my face with spray;
And shall my sense pierce love, — the last relay
And ultimate outpost of eternity?

Lo! what am I to Love, the lord of all?
One murmuring shell he gathers from the sand, —
One little heart-flame sheltered in his hand.
Yet through thine eyes he grants me clearest call
And veriest touch of powers primordial
That any hour-girt life may understand.

時間と無時間の境界に「扉と窓」のように吹きさらされている「暗い名」は、先のソネット「重ね書き」のように、時間の呪縛から逃れられない不吉さを予感させるが、セステットで調子は一変し、ダンテの「新生」を彷彿とさせる「愛」の神の力によって、「根源の力の…手触りそのもの」が、女性の瞳から与えられる様子が語られる。

第48番「愛の中の死」(“Death-in-Love”)では、「生」の従者として、旗を翻して現れた「愛」が、轟音とともに、強い威力を詩人に及ぼして、誕生以前の、「暗い門」をくぐる前の「記憶できない時間」(“immemorable hour”)を思い起こさせようとする。

SONNET XLVIII DEATH-IN-LOVE (1869)

THERE came an image in Life's retinue
That had Love's wings and bore his gonfalon:
Fair was the web, and nobly wrought thereon,
O soul-sequestered face, thy form and hue!
Bewildering sounds, such as Spring wakens to,
Shook in its folds; and through my heart its power
Sped trackless as the immemorable hour
When birth's dark portal groaned and all was new.

〔「春」も目を覚ますような途方もない音が
 はためく布から巻き起こり、その威力は僕の心臓を貫いて
 駆け巡った。あの記憶できない時間のように、
 誕生の暗い門が苦悶し、すべてが生まれ変わったあの時のように、跡
 形も残さずに。5-8行、拙訳〕

But a veiled woman followed, and she caught
 The banner round its staff, to furl and cling, —
 Then plucked a feather from the bearer's wing
 And held it to his lips that stirred it not,
 And said to me, "Behold, there is no breath:
 I and this Love are one, and I am Death."

現世の時間の外にある永遠の至福を詩人に仄めかした「愛」は、しかし、追いかけてきた「死」に捕えられて息絶える。悲劇的な結末に思えるが、タイトルが「愛の中の死」であり、最終行で、「愛」と「死」は同一の存在とされていることから、両者は「生の家」の中で、ひとしく生命を保ち続ける存在であり、帳の彼方の無時間の領域や知恵が詩人に閉ざされていないことが暗示される。¹²

このように、ロセッティの「生の家」のテキストは、様々な時間の局面の融合、真理を探るための知恵と言葉への懐疑と期待という旧約聖書「コヘレトの言葉」の特徴を取り入れながら、時に、時間が重層的であるがゆえにその呪縛から逃れられない空しさを詠い、時に、誕生以前や死後の無時間の領域や、現世の知覚を超えた「根源の力」に、恩寵のように触れた瞬間の喜びを語っている。「雲の境界」(“The Cloud Confines”)において、ロセッティは不可知論的立場を前面に出していたが、書き換える前の詩行に込められた思い¹³つまり、命(「生命の粒子」)は消滅するのではなく地上の時空を超えた存在に吸収されて再生するのだ、¹⁴という考えは、旧約聖書のテキストや中世恋愛詩の伝統と融合しながら、彼のソネット群においても変奏を奏でている。

そして、コヘレトの言葉からロセッティに受け継がれた時間の観念は、20世紀に、T・S・エリオットの『四つの四重奏』(*Four Quartets*)のなかの「バート・ノートン」(“Burnt Norton”)の冒頭に引き継がれているように思える。¹⁵

Time present and time past

Are both perhaps present in time future,

And time future contained in time past.

If all time is eternally present

All time is unredeemable.

What might have been is an abstraction

Remaining a perpetual possibility

Only in a world of speculation.

What might have been and what has been

Point to one end, which is always present. (“Burnt Norton” ll.1-10)

現在・過去が未来に含まれ、未来が過去に含まれ、すべての時間が現在にある、という表現はまた、旧約聖書、ヴィクトリア朝のロセッティ、20世紀のエリオットのテキストが重層的に重なりあう様をあらわしているともいえる。エリオットのように、アングロ・カトリックの伝統の中で、キリストの受肉に時の償いの救いを見出すことはできなかったが、ロセッティの時間に対する戦い、時間の感覚の美学が20世紀文学へ確実に受け継がれていることを考えれば、彼は隠れたヴィクトリアン・ソロモンとして、19世紀の唯美主義詩を未来に向けて開いたといえるだろう。

本稿は、日本ヴィクトリア朝文化研究会第20回全国大会(2020年11月28日)シンポジウムにおける発表原稿に加筆・修正を施したものである。引用文中の下線はすべて筆者による。本文中、ロセッティの詩の日本語訳は、“The Cloud Confines”と“Death-in-Love”(拙訳)以外は『D. G. ロセッティ作品集』(岩波書店)の松村伸一氏による翻訳を引用した。

文末脚注

- 1 批評家・詩人。1882年に心霊研究協会 (Society of Psychical Research) を創設したことで知られる。
- 2 ハミルトンは、しかし、同書において、当時揶揄・嘲笑の対象となった「気取った表面的な」「偽の唯美主義」に対して、ラスキン、ロセッティ、モリス、ワイルド等のより高尚で純粋な「唯美主義」を区別して評価している。
- 3 ロセッティの、現世の彼方を仄めかす神秘的な女性の顔の表象については、拙論「顔 / 境界の彼方—D・G・ロセッティの無表情な美女たち」を参照。
- 4 拙論「ベアトリーチェの造型—D・G・ロセッティのダンテ『新生』翻訳再考」『中世主義を超えて—イギリス中世の発明と受容』を参照。
- 5 引用箇所は『ウェストミンスター・リヴュー』誌 (*Westminster Review*) の「コールリッジ論」に掲載され、この批評は大幅な削除・修正を経て1889年出版の『鑑賞批評集』 (*Appreciations*) に収録された。削除された部分は死後に出版された。『誤謬表』において、教皇ピウス9世は、カトリックの絶対性を脅かす当時の進歩思想 (汎神論、自然主義、社会主義等) を誤りであると強く批判した。
- 6 母方祖父のガエターノ・ポリドーリ (Gaetano Polidori, 1764-1853) は、詩人・劇作家のアルフィエーリ (Vittorio Alfieri, 1749-1803) の秘書を務めたが、イギリスに移住。ウィリアム・マイケルによると「名目上カトリック」 (*Some Reminiscences* 1: 118)。その妻となるイギリス人 Anna Maria Pierce は敬虔なイングランド国教会信徒 (*Family Letters* 1: 31)。二人の間の八男八女の子供の中には、ロセッティの母のほか、バイロンの大陸旅行に随行した医師のジョン・ポリドーリ (John Polidori, 1795-1821、懐疑主義者、服毒自殺) がいる。 (*Family Letters* 1: 33)
- 7 ウィリアム・マイケル・ロセッティは、1847年頃に教会に通わなくなると告白している。 (*Some Reminiscences* 1: 128)
- 8 “agnostic” という語は、1869年に Thomas Henry Huxley が、当時の主要なイギリスの思想家たちが集う Metaphysical Society (1869-1880) で提起された問題へ応答する際に造語したものであると、一般には認識されている (Leightman 10) が、初出は他の人物という説もあり、この語の誕生については Bernard Leightman, *Origin of Agnosticism* に詳しい。
- 9 ロセッティの、世界の意味や自己を超えた普遍的な実在への探求を扱った優れた論考として McGowan (1982年) がある。この論考では「雲の境界」も論じられているが、詩人に「完全な知識が訪れるのは死とともに」であると、最終連への言及をしているのみで、書き変えられる以前の詩行への考察はされていない。

- 10 二つ目の複数のバージョンは、“and”と“&”の違いなど僅かな差異以外は同一のため、W・M・ロセッティ宛のみを記載した。
- 11 個体の生命が普遍的な大きな存在に吸収されるという同じ主題を扱ったロセッティの詩には、「生の家」のソネット第79番「一弦琴(“The Monochord”) 1870年作」がある。
- 12 ソネット第48番に関しては『緑の信管と緑の庭園』所収の「ダンテ・ゲイブリエル・ロセッティ 訳詩」で詳述し、本書掲載の拙訳の一部を再掲した。掲載許可をいただいた岩永弘人先生と音羽書房鶴見書店に感謝する。
- 13 「雲(“cloud”)」は、真理を隠す、あるいは隙間から仄めかす帳の比喩として、ロセッティの詩に頻出するが、「コヘレトの言葉」の最後の章(12章)は、「若き日に、あなたの造り主を心に刻め…雨の後にまた雲が戻って来ないうちに(“nor the clouds return after the rain”)」という勧告で始まる。
- 14 「生命の粒子」が大きな存在に吸収されて再生する、という考えは、この詩の草稿が書かれる3年前に『ウェストミンスター・リヴュー』誌に発表されたウォルター・ペイターの書評「ウィリアム・モリスの詩」(1868)の後半部分(のちに『ルネサンス』初版(1873)の結論となる部分)の冒頭の表現と響き合う。ここでペイターは、人間の「身体的生活」は、「科学が名前を与えている自然の諸要素の結合」であり、周囲に広がって刻々と再生される様を述べている。吸収と拡散という逆の志向性を示すとはいえ、共通の構造を持つ発想である。これはさらに、A. E. ハウスマンの『シュロップシャーの若者(*A Shropshire Lad*, 1896)』に綴られ、E. M. フォースターの『眺めのいい部屋(*A Room with a View*, 1908)』の中で引用された一節「彼方より、…生命の材料が結合してわたしを成すために／吹いてきた(“From far, . . . The stuff of life to knit me / Blew hither”)」に引き継がれている。
- 15 ロセッティの「生の家」における「『時に縛られた生』の救済を求める格闘」とエリオットの『四つの四重奏』の関連性については、松村伸一氏による1990年の論考における指摘がある。この論考で両者の類似性の具体例は挙げられていないが、ロセッティの時間の感覚の重層性について筆者は多くを学んだ。

本拙論で挙げた「バート・ノートン」冒頭の他にも、『四つの四重奏』にはロセッティの影響があると思われる箇所が幾つかあり、例えば「ドライ・サルヴェイジズ」の3章に登場する、耳には聞こえず、言葉で語られない「時間のつぶやく貝殻(“The murmuring shell of time”)」は、本論で引用したソネット第34番「暗い鏡」の10行目で、愛の神が砂浜から拾う「つぶやく貝殻(“One murmuring shell he [Love] gathers from the sand”)」や、第97番「重ね書き」の3行目で、擬人化された一人称の時間が、詩人の耳に押し当てる「死の海の貝殻(“Unto thine ear I hold the dead-sea shell”)

を強く想起させる。

引用・参考文献

- Doughty, Oswald. *A Victorian Romantic: Dante Gabriel Rossetti*. London: Frederick Muller, 1949.
- Eliot, T. S. *Collected Poems 1909-1962*. New York: Harcourt Brace, 1936.
- Gauld, Alan. *Founders of Psychical Research*. London: Routledge, 1968.
- Grieve, Alastair. "The Pre-Raphaelite Brotherhood and the Anglican High Church." *Burlington Magazine* 111 (1969): 294-5.
- Hamilton, Walter. *The Aesthetic Movement in England*. 1882. New York: Garland, 1986.
- Howard, Ronnalie Roper. *The Dark Glass: Vision and Technique in the Poetry of Dante Gabriel Rossetti*. Athens: Ohio UP, 1972.
- Lightman, Bernard. *Origin of Agnosticism: Victorian Unbelief and the Limits of Knowledge*. Baltimore: Johns Hopkins UP, 1987.
- Mays, James L., et al., eds. *Harpers Bible Commentary*. San Francisco: Harper, 1988.
- McGowan, John P. "'The Bitterness of Things Occult': D. G. Rossetti's Search for the Real." *Victorian Poetry* 20 (1982): 45-60.
- Myers, Frederic W. H. "Rossetti and the Religion of Beauty," *Cornhill Magazine* 47 (1883): 213-224.
- Norton, David, ed. *The New Cambridge Paragraph Bible with the Apocrypha: King James Version*. Rev. ed. Cambridge: Cambridge UP, 2011.
- Pater, Walter. *Appreciations*. London: Macmillan, 1910.
- . "Coleridge's Writings." Rev. of *Conversations, Letters, and Recollections of S. T. Coleridge*, ed. Thomas Allsop. *Westminster Review* ns 29 (1866): 106-132.
- . "Poems by William Morris." *Westminster Review* ns 34 (1868): 300-12.
- . *The Renaissance: Studies in Art and Poetry: The 1893 Text*. Ed. Donald L. Hill. Berkeley: U of California P, 1980.
- Rossetti, Dante Gabriel. *Ballads and Sonnets*. London: Ellis, 1881.
- . *The Complete Writings and Pictures of Dante Gabriel Rossetti: A Hypermedia Research Archive*. Ed. Jerome J. McGann. 2002. U of Virginia. <<http://village.virginia.edu/rossetti/index.html>>.
- . *The Correspondence of Dante Gabriel Rossetti*. Ed. William E. Fredeman. 10 vols. Cambridge: Brewer, 2002-2015.
- . "Of Life, Love, Death: Sixteenth Sonnets." *Fortnightly Review* ns 5 (1869): 266-273.

- . *Poems*. London: Ellis, 1870.
- . *Poems: A New Edition*. London: Ellis, 1881.
- . *The Works of Dante Gabriel Rossetti*. Ed. William Michael Rossetti. Rev. ed. London: Ellis, 1911.
- Rossetti, William Michael. *Dante Gabriel Rossetti as Designer and Writer*. London: Cassell, 1889.
- ed. *Dante Gabriel Rossetti: His Family Letters with a Memoir*. 2 vols. 1895. New York: Cambridge UP, 2012.
- . *Some Reminiscences of William Michael Rossetti*. 2 vols. 1906. New York: AMS, 1970.
- Spencer, Herbert. *First Principles. Project Gutenberg*.
<https://www.gutenberg.org/ebooks/55046>
- Surtees, Virginia. *The Paintings and Drawings of Dante Gabriel Rossetti (1828-1882): A Catalogue Raisonné*. 2vols. Oxford: Clarendon P, 1971.
- Wright, Terence R. “The Writings in the Church: T. S. Eliot, Ecclesiastes and the *Four Quartets*. *Writing the Bodies of Christ: The Church from Carlyle to Derrida*. Ed. John Schad. Aldershot: Ashgate, 2001. 25-39.
- 加藤千晶 「顔 / 境界の彼方—D・G・ロセッティの無表情な美女たち」『文学と絵画—唯美主義とは何か』英宝社、2005年、25-55頁
- 「バアトリーチェの造型—D・G・ロセッティのダンテ『新生』翻訳再考」『中世主義を超えて—イギリス中世の発明と受容』慶應義塾大学出版会、2009年、299-322頁
- 「ダンテ・ゲイブリエル・ロセッティ 訳詩「愛の中の死」(ソネット集「生の家」第48番)」『緑の信管と緑の庭園：岩永弘人先生退職記念論集』、音羽書房鶴見書店、2021年、420-423頁
- 『聖書：聖書協会共同訳 旧約聖書続編付き』日本聖書協会、2018年
- 野谷啓二『オックスフォード運動と英文学』開文社、2018年
- フォースター、E. M. 西崎憲・中島朋子訳 『眺めのいい部屋』筑摩書房、2001年
- 松村伸一「D.G.ロセッティ『生の家』における瞬間の二重性」『リーディング』第10号、1990年、22-34頁
- ロセッティ、D. G. 南條竹則・松村伸一編訳『D. G.ロセッティ作品集』岩波書店、2015年

Summary

Pursuing Beauty and Questing for Knowledge —D. G. Rossetti's Aspiration to be a Victorian Solomon

Chiaki Kato

For his review of the 1883 exhibition of D.G. Rossetti's work, which took place the year following Rossetti's death, F.W.H. Myers chose the title "Rossetti and the Religion of Beauty." In it, Myers states that "the 'aesthetic movement' is not a mere fashion of the day," underlining the influence of the movement which he asserted surpassed that of science or theology. Myers's review helps us gain insight into Rossetti's response to the spirit of an age when scientific developments undermined religious belief. This paper aims to clarify the process of Rossetti's aspiration and struggle, in an age of religious crisis, to capture what is hidden beyond human perception, to find what lies behind tangible phenomena. This is done mainly by analysing Rossetti's poems in reference to the book of *Ecclesiastes* in the Old Testament of the Christian Bible.

Born into a family where Catholics and Anglican Protestants coexisted, the Rossetti brothers remained sceptics, though Dante Gabriel applied Catholic motifs to his art (largely for aesthetic purposes) in his early career. He was less a confirmed "agnostic" than his brother, William Michael, showing an interest in mysticism and immortality. A very few remarks by D. G. Rossetti about his religious standpoint helps us understand that he seemed to yearn for some unknowable existence to which he could entrust his whole being.

An important clue can be found in Rossetti's reading of *Ecclesiastes* (traditionally ascribed to Solomon), which his brother indicates nurtured

the poet's mind. Comparison between *Ecclesiastes* and Rossetti's sonnets in "The House of Life" demonstrates some common characteristics, such as deploring the vain pursuit of knowledge beyond human understanding, trusting/mistrusting words, and the concurrence of past, present and future. By employing features of *Ecclesiastes* and fusing them with the traditions of medieval love poetry, Rossetti at times manifests his unavailing wish to be released from the constraints of time, and at other times conveys his delight when glimpsing the timeless realm before birth or after death, as if he were given the "gift of grace unknown," or sensing the "primordial" power into which he wishes to be merged. It can also be said that his path was followed by 20th-century poet, T. S. Eliot, thus ensuring that Rossetti can be called a Victorian Solomon, laying the path to the future for aesthetic poetry.

